

# カタロニアの文学

大 高 順 雄

## 1

カタロニアCatalunyaとはイベリア半島の東北部に位置する諸都市：バルセロナBarcelona、タラゴナTarragona、ジェイダLleida、ジロナGironaを含む地方から、北ではフランス領内ベルピニャンPerpignan、ルーシオンRoussillon、の両市、コンフランConflent、イスパニアとフランスとが共有するセルダーニャCerdanyaの両地方に及び、地中海のバレアレス諸島Balears：マジョルカMallorca、メノルカMenorca、エイビサEivissaに跨る地域の名称である。カタロニア語は西部方言と東部方言とに大別される。14世紀にカタロニア人がSardegna島を支配した名残りとして、Algueroでは東部方言が残存している。

## 2

今日、catalàないしcatalanescと呼ばれるこの言語がロマン語の1つであることは言うをまたない。それは日常生活のあらゆる面で用いられる。もっとも、数世紀以前から上流市民階層では、カスティリア語castellanoしか使用されない傾向があったが、日常語としてのカタロニア語がカスティリア語によって放逐されたことは一度もなかったことを明記しておこう。それは独立して発達した言語である。

文学語としてのカタロニア語は、話し言葉の影響を受けて発展し、中世以降に衰退の数世紀を経た今日、公用語として文学的要求を満たしている。文法学者Pompeu Fabra(1891—1952)は書き言葉の正綴法を制定し、文法規則を確立しようと努力した。Fabraが判断の基礎に置いたものは、周辺部の言語ではなく、都市バルセロナの言語であったことは注目に値する。

## 3

歴史的に見れば、カタロニアは「2言語併用」地域である。しかしそれはベルギーにおけるように、同一の政治的枠内でフランス語のWallonie方言とオランダ語のFlandres方言とが併用されている状態を意味しない。同一の民族が歴史上の異った時代に2つの言語を使用したという意味に解されるべきである。

カタロニア侯国は1134年以降アラゴンAragón王家と共にアラゴン王国を形成し、文化史上一定の役割を演じた。そのころから14世紀にかけて、カタロニア伯領と南フランスと

の間には文化的関係が緊密であった。その結果、プロヴァンス Provence の偉大な吟遊詩人 Guilhem de Cabestanh は、Guilhem de Berguedà と同じように、カタロニアで世に知られた。この時期にカタロニア語の作品も作られたに違いないが、推定の手がかりとして現存するものを時代順に排列することは困難である。

上述のごとく、カタロニアはカスティリア語を用いるアラゴン王国に属していた。13世紀以降、王たちは公文書および私文書をカタロニア語で認めることもあったが、行政上・政治上の交渉には両語を併用することが多かった。バルセロナ王家は1410年に滅亡し、トラスタマ Trastáma 家が君臨するようになった。この王家はカスティリア語を用いたので、カタロニア語は影をひそめ、文学作品にも使われ難くなった。15世紀では、まず散文作家 Enrique de Villena (ca 1384—1434) が、ついで詩人たちが、事実上「2言語併用」を行わざるを得なくなった。こうしてバルセロナもバレンシアもカタロニア語の中心ではなくなっていった。

Fernando と Isabel (1451—1504) とが15世紀末、アラゴン王位とカスティリア王位とを統合した時、カスティリア語はいつそうカタロニアに進出した。アラゴンに生まれた Fernando は治世を通じて(1479—1516)、両王国の政治的勢力の均衡を保とうと努めた。カタロニア語は宮廷内では通用したが、文学の表現手段として認められなかった。1511年にまとめられた「詩歌集」 *Cancionero general* にはカスティリア語による作品の方がカタロニア語による作品よりもはるかに多い。

統一イスパニア王国という理念は、神聖ローマ皇帝 Karl 五世 (位1519—56) のもとで空前の大帝国として実現した。それはイスパニア王 Felipe 二世 (位1556—98) の治下において、絶対王政の絶頂期を出現させた。カタロニアは地方的存在に甘んじた。16世紀に活躍した Juan Boscà (ca 1490—1542) はカタロニア生れであるにもかかわらず、カスティリア語で制作し、姓を Boscan とカスティリア語風に改めさせた。

しかし、カタロニアに生まれた作家はカスティリア語を用いるのに一般に未熟であったため、沈黙するか、模倣に走るかした。こうしてカタロニアの文学的衰退は決定的になった。17～18世紀の歴史が証明するように、フランスとの戦いにおいても、王位継承戦争においても、カタロニア人はイスパニアのために戦った。しかしその都度、カタロニアはイスパニア政府の失敗の責を負わされた。作家たちはカスティリア語を余儀なく用いながらも、カタロニア語に対する愛着を忘れることができず、文学的・政治的生命力を回復させようと努めた。しかしこの言語は18世紀以来社会的生命力を失い、学校から放逐され、公用語とはみなされなくなった。

#### 4

作家たちの希望の実現は、19世紀初頭になって、ナポレオンの侵入と立憲闘争とによって一頓挫したとはいうものの、やがてロマン主義と自由精神謳歌という好都合な風土を見

出した。1820年代から1840年代にかけて、カタロニア語・文学の「復権」のきざしが現われた。先駆者 B. C. Aribau (1798—1862), Rubió y Ors (1818—99), Milà y Fontanals (1818—84), Balaguer (1832—1901) 等はカスティリア語の教育を受けたが、カタロニア語によって作詩した。バルセロナでは「カタロニア・ルネサンス」Renaixença を主張する少数の文人が活動し、「花遊び」Jochs florals は19世紀末の動向を代表する。その後、Jacinto Verdaguer (1848—1902), Angel Guimerà (1848—1924), Vilanova (1840—1905) のような作家がカタロニア語だけで創作した。

20世紀初頭においては、カタロニア語とカスティリア語とを併用する作家がまだ存在したが、カタロニア語の復活には刮目すべきものがあつた。

しかしこの飛躍は中断された。イスパニア「市民戦争」(1936—39)において、カタロニアはマドリド政府と対立したからである。ピカソが「ゲルニカ」Guernica (ニューヨーク・モダン・アート博物館所蔵) に惨劇の舞台となった同名の町を描いたことは記憶に新しい。カタロニア語を公的に使用することも、外国語の資料をこの語に訳出することも許可されず、カタロニアの古典文学を出版することさえ極めて困難になった。文筆家・作家は沈黙を強いられたか、カスティリア語を用いざるを得なくなったかである。カタロニアでは「2言語併用」さえ不可能になった。

当時、バルセロナ大学にはカタロニア語・文学講座が1つあり、いくつかの講義と演習が正規のカリキュラム以外で続けられていた。しかし「市民戦争」を弾圧した故フランコ将軍 Generalissimo Franco は1939年この講座を廃止させた。この講座がマドリド大学に復活したのは1953年のことである。カタロニア語・文学をカスティリアの首都でしか学び得ないという状態は皮肉ではあつたが、それ以前の事情に比べればまだ容認することができた。バルセロナ大学にカタロニア語学・文明講座が新設されたのは、1961年のことである。現在はこの大学に「カタロニア研究所」Institut d'Estudis Catalans も併設され、活潑な研究活動が進められている。

## 5

カタロニア文学史には、カタロニア語を用いた作家だけでなく、「2言語併用」を行った作家も、専らカスティリア語を使用した文人も、さらには、ラテン語で書いた Luis Vives (1492—1540) のような文筆家も加えなくてはならない。

最古の言語資料は、12世紀後半までに成立したとされる「法令集」*Forum judicum* である。これは西ゴート語の本文をカタロニア語に訳して注を加えたもので、法律書・宗教的価値が高い。

12世紀末から13世紀初頭にかけて、断片的な「福音書講話」*Homelias* が現われた。これはウルジェル Urgel 司教区オルガニャ Organyà で発見された。その本文はプロヴァンス語の影響を強く留めている。

この時期に作られたと思われる抒情詩は今日に伝わっていない。カタロニアの抒情詩人はプロヴァンス語で書き、南仏抒情詩人として活動したものと推定される。だからカタロニア抒情詩の特色がプロヴァンス語の詩の中に痕跡として残り得たのであろう。生歿年は不明だが、Guerau de Cabrera, Ramon Vidal de Besalú という詩人らに続いて、Guilhem de Berguedà (ca 1180—1200), アラゴンのJaume一世 (1208—76), Cerverí de Gironaの偽名で知られるPedro三世 (1239—85) が活躍した。

従って、文学語としてのカタロニア語はまず散文として現われた。最初の大作家がRamon Llull (ca 1233—ca 1315) である。Llullは広汎な神学上の論文、抒情的・教訓的な作品を多く産んだ。その言語にはプロヴァンス語の影響が残っているが、文は論理的に構成され、同時代のフランス語文よりもはるかに整然としている。Llullの目的はユダヤ人とサラセン人とをキリスト教に改宗させることであり、ヨーロッパ・アフリカ各地に行脚したため、行動の人と呼ばれる。熱情的で行動的な詩魂は作品に独自の色合を与えている。

Llullと同時代に生きたArnau de Vilanova (1311歿) は、ラテン語で学問上の著述を行い、カタロニア語で神学上の論文を書いた。

13世紀には、物語風の散文年代記が生まれた。Jaume一世の「処世録」*Libre dels feyts* とBernat Desclot (ca 1230—88) の「ペドロ大王伝」*Libre del Rey En Pedro* とが代表作である。

14世紀にはいっても、散文による物語風年代記が作られた。Ramon Muntaner (1265—1336) の「年代記」*Cronaca* (1325—28) と「ペドロ四世威厳王」*Pedro IV el Ceremonioso* とは政治性・社会性の強いことを特徴とする。

この時代に抒情詩人がアラゴン王国の宮廷に現われた。Pere March (Ausiàs Marchの父) とJaume Roig (1401—78) とが傑出している。Pedro四世は1388年、アラゴン宮廷で戦合戦を催し、賞を与えようと企て、1393年その子Juan一世はトゥールーズToulouseの戦合戦にバルセロナ代表を参加させた。しかしこれらの抒情詩には独創性が欠けている。

さらに、プロヴァンスとフランスとの両方から刺戟を受けた韻文作品も作られた。「歌物語」*Novas rimadas* や「石投げ歌」*Codoladas* がそれである。主題から見れば、G. de Toroellaの「話」*Faulas* におけるように、Artur伝説を素材とした架空的なものと宗教的・教訓的なものとに分かれる。Bernat Metge (ca 1350—1413) は写實的・諷刺的性格の作品を世に問い、「夢」*Lo Somni* (1399) の示すように、ラテン語の影響を受け、ペトルカの文体をもって活躍した。

フランスの言語と文化は、この世紀のカタロニアに影響を与えた。多くの作品が翻訳され、美術や音楽にもフランスの色合が看取される。しかし、Francesc Eiximenès (ca 1340—1409) は広い百科辞典的知識を優雅な「物語」*Contes i Faules* (1384) に盛込んだ独自の存在である。世紀末にはマジョルカに生まれたAnselm Turmedaが懐疑的・諷刺的作品

「3ばの口論」 *Disputa de l'Asel*によって矛盾だらけの姿を現わす。

15世紀になると、人文主義的色彩が濃くなった。Antoni Casalsは15世紀初頭に出、Senecaに傾倒し、バレンシアの修道院で散文を書いた。Rois de Corella (1430—1500)は世紀末に活躍し、擬古主義的特徴をもった宗教的作品と世俗的作品とを生んだ。人文主義の思潮はラテン語作家Nicolau Quilis, Francesc Alegre, Ferrando Valenti等の努力によって広がった。他方、Andreu Febrerが1429年にDanteの「神曲」を訳し、Bonifaci Ferrerが1478年に聖書を翻訳した事実も忘れてはならない。イタリア文学や古典文学はこうしてカタロニア語に訳されていった。イタリア語の原典から翻案された「クリアルとグェルファ」 *Curial e Güelfa* (作者不明, 1443—60) は騎士物語の傑作であり、Joan Martorell (1488歿) の「白い暴君」 *Tirant lo Blanc* (1450—90) は騎士道をバレンシア風に諷刺したものとして有名である。バレンシアにはこのころ、Isabel de VillenaやMiguel Perezによって、聖書伝が豊かな発達を見せた。

政治的修辞学の分野では、14世紀のPedro 威厳王、15世紀のMartí一世、枢機卿Joan Margarit (1421—84) が人文主義的雄弁に勝れ、個性ある作品を残した。彼らと対照的な人物としては、バルセロナ出身の修辞学者Felip de Mallaとバレンシア出身の説教家S, Vicente Ferrerがいる。

バレンシアでは、Jordi de Sant Jordi (ca 1395—1440) とAusiàs March (ca 1397—1458) が活躍した。共に南仏抒情詩やイタリア文学の影響から脱し切っていない。しかしJaume Roig (ca 1401—78) の諷刺詩「鑑」 *Spill* (ca 1460) は鋭い機智に溢れている。

15世紀を通じて、カタロニア語とカスティリア語との「2言語併用」現象はますます広まり、やがてバルセロナもカスティリア語圏内に吸収されていく。

16世紀では、バルセロナ産のPere SerafiがAusiàs Marchの後を継いでまだ作詩にふけることができた。17世紀にはカスティリア語が完全に優位になる。しかしバロック詩人で諷刺的なFrancesc Garcia, 田園詩人Fransesc Fantanella, 技巧に陥ったJosep Romaguera等は時にカタロニア語の詩も書いた。

18世紀になると、カタロニア語は地方語としての制約を受け、全く民衆的な詩にしか用いられなくなった。ただ、世紀末にバレンシアでカタロニア語復活運動が起ったことは特筆に価しよう。

19世紀初頭でも、Balmes (1810—48) やPiferrer (1818—48) のように、実際上カスティリア語しか用いなかった者もあるが、やがてJoan Maragall (1860—1911) やMiguel S. Oliver (1864—1920) のように、「2言語併用」を行なった作家も出るようになった。しかしバルセロナでは、Bonaventura Carles Aribau (1798—1862) が1833年「カタロニア・ルネサンス」を高らかに歌い、1841年Joaquim Rubió i Ors (1818—99) が「ジョブレガットの笛吹き」 *Lo Gaiter del Llobregat*によってこの運動の宣言を行なった。1859年Milà y Fontanalsの主唱で「花遊び」が催され、抒情詩と小説の分野に新たな衝撃が加

えられた。演劇では、Frederic Solers (1839—95) と Angel Guimerà (1849—1924) が好評を博した。世紀末では、Jacint Verdaguer (1845—1902) とともにカタロニア語復活の努力は効を奏した。

20世紀にはいると、「近代主義」がカタロニア文学に有利に働き、マジョルカ派の Miquel Costa y Llobera (1854—1922), M. S. Oliver (1864—1920), Joan Alcover (1854—1926) がカタロニア語の擁護に結集した。画家・小説家 S. Rusiñol (1861—1931) は「花遊び」を横目で見ながら、Ignaci Iglesies (1871—1928) と共に、社会批判の作品を世に問うのに懸命であった。市民戦争に突入するまで、カタロニア文学は多くの作家を算える。E. d'Ors (1882—1954), Joaquim Ruyra (1858—1939), Victor Català (1873—?), Josep Maria de Sagarra (1894—1961), Josep Carner (1884—1970), J. M. López-Picó (1886—1959), Joan Salvat Papasseit (1894—1924), J. E. Martínez Ferrando (1891—?), P. Bertrana (1867—1941) 等である。市民戦争以後、Carles Riba (1893—1959) は抽象的な抒情によって人気を得たが、個性のない小説を書く者も多く現われた。

## 6

上述したように、カタロニアの文学は豊かな展開を見せ、個性的な産物を多く残した。独自の性格を十分に発揮できなかった時期もあるが、それだけますます異質なものを同化しようと努めた。西欧の新らしい動向と衝動とはカタロニアを通してカスティリアへ、さらにイベリア全土に及んだ。10世紀に Ripoll 修道院がアラビアの科学を紹介することにおいて決定的役割を果たしたことを想起しよう。ラテン作家 Augustinus, Cicero, Titus Livius, Seneca, Valerius Maximus, Quintinius Curtius, Paladius Boetius 等はカタロニア語訳からカスティリア語へ重訳されて初めてイベリア半島に知られた。Petraea の影響はイタリア以外での地ではまずカタロニアに現われ、Dante の「神曲」は1429年以前にカタロニア語に訳された。Thomas a Kempis の「キリストのまねび」*Imitatio Christi* は他のロマン語に先がけて、カタロニア語に訳された。

カタロニア伯とプロヴァンス伯との文化的交流によって、南仏抒情詩は12世紀にすでに Toledo の宮廷に達し、14世紀末には Enrique de Aragón によってカスティリア宮廷に伝播され、Alfonso V de Aragón の宮廷にイスパニア人文主義が芽生えたのである。

バレンシアとバルセロナとは地中海に開いた港によってイタリアとイベリア半島とを繋いだ。バルセロナの生んだ Boscà は意識的にイタリア語の11音節詩句をカスティリア語に導入しようとした。16世紀初頭から因襲的な牧歌詩よりも市民的な風俗劇を好んで上演したバレンシアには、Feliz Lope de Vega Carpio (1562—1635) がマドリドから追放されてきた。19世紀末から20世紀にかけての飛躍の時期に、カタロニアは新たな発展を求めた。Ibsen (1828—1906) がイスパニア文学に迎えられたのも、カタロニア文学の仲介によ

るものである。フランスの高踏派や象徴派もカタロニアに独特な詩を産み出した。「近代主義」はカタロニア全土に根を下ろし、美しい花を咲かせる精神的な糧となった。

### おわりに

本稿はもともと Jordi Rubió i Balaguer 著 *Die Katalanische Literatur* (in *Die Literaturen der Welt*, Zürich, Kindler, 1964, pp, 337-51) の邦訳として企てられたものである。私は1966年7月のある暑い日に著者の自宅を訪れて、この原本を頂いた。私は先生の目には若く映ったようである。今つぎのような献辞を読むとおもはゆい気がする。

Al jove prof. Y. Otaka,  
en record de la seva visita  
i amb els millors auguris,

Jordi Rubió

Barcelona, lo 8-VII-66.

私は本論を訳出して紹介することを約束して、先生の宅を辞した。それからもう13年の歳月が流れる。その間にカタロニアの政治的情勢も大きく変化した。著者が執筆当時に危惧された事態はほぼなくなっている。そこで私は数種の文学史書を参照しつつ、原文に何箇所か見られる難渋な表現を平易な訳語句に置き換えた。こうして出来上がった本稿はもはや純粋な訳物ではなく、著者の原本とはいささか異なるものになってしまった。しかし私は著者の意図を的確・正確に表現したつもりである。先生は私の意を理解下さると同時に、本論の紹介に13年も費したことを寛恕して下さいと思う。

1979年6月 (本学教授)